
生体医工学科

工学基礎科目・専門科目

1. 生体医工学とは何か

生体医工学は工学的な技術をもちいて、これまでの医学的技術では解決しにくい人間の生命と健康、福祉などに関する諸問題に取り組む学際領域である。この領域は米国など先進国では医学部や工学部の中に以前より見受けられる専門領域でもある。しかし日本ではこのような特徴ある専門を備える大学は本学を除いてまだ少ない。また世界的にみると、多くの生体医工学系の学科は予防・診断・検査・治療など臨床医療を対象とした問題解決の知識と技術を目指としている。すなわち医療機関に通う疾病をもつ人々に向けた問題解決が到達目標である。本学科は生体医工学をさらに広い範疇にとらえる特徴をもつ。すなわち病院にはあまり縁のない一般の健康な人々をも対象とした生命に関わる問題解決を目標に含んでいる。私たちを取り巻く現代社会の要求と近未来技術の可能性をもとに新しく生まれた到達目標である。

生体医工学の技術をもちい、一般の健康人を対象として問題解決をはかる機会は日常にいくつも見受けられる。それは生活習慣病の早期発見技術のような臨床的問題だけではない。日々のストレスの緩和法や癒しの技術など、医学的にも十分理解されていない課題もあり、工学的アプローチに期待が寄せられている。さらには、仮想現実空間の構築、身体の特徴を利用した個人認証や脳波による機器の自動制御など、疾病には直接関係しない夢のような課題がすでに多数存在し、日々新しく創造されている。本学科は、その最適解を的確に得るための医学的知識や工学的知識、技術を身につける学舎（まなびや）である。そして生命に関係する諸問題にまともを得て反応するセンスを身につける学舎でもある。

2. 本学科では何を学ぶか

医学と工学、それぞれの学問領域のなかで生体医工学に密接に関係する知識と技術を学ぶ。低学年では、人体骨格の構造などを示す解剖学や各器官の正常機能を説く生理学など、基礎医学を学習する。同時に、電磁気学や電気回路などの電子工学の基礎、工業力学や機械材料学などの機械工学の基礎を学習する。高学年では、健康を評価するための診断内科学や脳の働きを探る脳神経認知学などの医学系知識を学ぶが、正常の（疾患をもたない）範囲が中心である。各種疾患に関しては卒業研究のテーマに則して選択して学ぶことになる。また生命に対する考え方の基本となる医の倫理や、個人差の中から真実を把握する医学統計学など医学と工学を融合する基本知識も学習する。

生体医工学科は2年間にわたる実習を重要視している。それらは福祉ロボット工学実習、生理学実習、臨床機器学実習、総合実習の各実習である。それらはロボットの設計作製から、解剖観察、心電図・脳波などの検査診断、外科手術手技、臓器の機能検査、総合病院での臨床見学など多種多様な内容である。これらの実習から学ぶ事柄は座学で学ぶ知識同様きわめて重要である。ただし座学と大きく異なることは、実習では目と耳だけではなく自ら手足を使って行動しなくては何も得られない点である。

生体医工学では複数の専門分野の知識が求められるが、いくつもの専門領域に選択を広めていくと知識が浅く広くなり4年間という学習期限では本来の専門性を極めにくい。このため、高学年における工学系の専門知識修得に関しては、電子工学または機械工学どちらか一方の専門を中心に選択して学び、専門性を高めることが望まれる。この場合、目安となることはコース科目（診断エレクトロニクスと治療メカトロニクス）の分類に注意することである。ただし、チャレンジ精神と体力が十分であれば、両方の工学専門科目を履修することも可能なようにカリキュラムは組まれている。

履修する科目により学び方にも特徴があるので意識する必要がある。工学系の授業では覚える内容も多いが、それ以上に解析し応用する能力を学ぶことになる。一方、医学系の授業では解剖学など脈絡なく丸暗記しなければならない場合と、生理学などのように暗記力と解析力を必要とする場合もある。しかし、医学と工学のそれぞれの特徴に対処する共通の学び方がある。すでにこれまで実行してきたことであるが、同じことがらを繰り返し脳に取り込む動作をすることである。脳は繰り返しで強化されるように作られている。

3. どの科目を選択するか

生体医工学科は複数の専門領域にまたがるために、専門性を高めるには履修科目数が必然的に多くなる傾向がある。この学科を選択した宿命と覚悟してほしい。卒業までに履修する科目は2年次中に計画しておくことで4年間で効率的に履修ができる。当然ながら入学当初は方向や興味が定まらなかったり、学業の途中で興味の方向が変わる恐れを抱くこともある。そのような状況に対処するには低学年では多岐にわたって履修することである。そのような履修は楽なことではないが高学年でどの方向にでもシフトできる安心感には代えられない。ただし多科目を履修しても成績が十分でないと、卒業研究では苦勞して発見した希望の研究室に所属できなくなる可能性が出るので注意が必要である。

低学年では一見では自分の興味とは関係ないタイトルをもつ科目がある。しかしそれらを「教養」のための科目と安易に判断してはならない。医療は総合産業といわれるように、将来、医学的な問題の解決に重要な示唆を与える専門知識が含まれる科目もある。もっともそれらの科目には自分の進む方向も研究室も定まった第4学年で履修可能な科目もあるので吟味するとよい。自分で判断できない場合はクラス担任の先生が細かい履修相談に応じてくれるので、気軽に訪ねることである。

診断エレクトロニクスの専門性を高めるには診断に必要な医学科目と電子工学系の科目、治療メカトロニクスの専門性では治療に関連した医学系科目と機械工学系の科目を選択する。別冊で渡された「生体医工学科 キャンパスライフ・ガイドブック」にも履修のヒントが載っているので参考にしてほしい。

4. 卒業後どこへ向かうか

生体医工学科は複数の専門知識を学ぶ学際領域である。このため大学の4年間で多くを学ぶには限界がある。そのため学習期間を学部卒業後にも延ばすことで、さらに専門性を高めて充実した知識と技術が得られる。この理由から大学院（博士前期課程と博士後期課程）が重要な進路選択の1つになる。また語学に力を付けていれば、欧米先進国の Biomedical Engineering 領域への留学も視野に入る。卒業後、1年または2年間の専門教育を受けることで臨床工学技士の受験資格を得ることも可能である。

医学と工学の基礎を学ぶことで、工学のみを学ぶ場合とは異なったものの見方や考え方が身につくと考えられる。その特徴は企業などの受け入れ側から見ると貴重な存在である。また、医学と工学の両方の基礎知識を身につけて卒業する人材もまだ少ない。これらの理由から本学科卒業後の就職に関する選択肢は広い。人間に直接関係する快適性や安全性がますます重要視されるこれからは、医学と工学を学んだ学生は電気機器メーカー、自動車メーカーなど一般企業への就職が有力である。また、学科の専門性から医用機器やリハビリ機器、健康機器の設計開発や、それら医療関連企業での運営管理、そして医療機関や専門教育職への就職がある。

5. おわりに

よく遊びよく学べとはまさに今の君たちに向けた言葉である。この行動力の発揮を通して、夢中になれることがら、打ち込めることがらを一刻も早く発見するとよい。発見した瞬間から自らの努力は苦痛には感じなくなる。脳はそうように作られている。

平成23年度 生体医工学科 教育課程表

○印:必修, △印:選択必修

区分	科目群	授業科目	必選の別	単位数	週 時 間 数								担 当 者 (平成23年度現在)
					1年		2年		3年		4年		
					前	後	前	後	前	後	前	後	
工学基礎	数学系	数学基礎		0	2								橋本、羽賀、澁谷
		微分積分学（1）（注1）	○	2	2	(2)							古田、友延、澁谷
		微分積分学（2）（注1）	○	2		2	(2)						古田公司、井上浩一
		線形代数学（1）	○	2	2								井上浩一、羽賀淳一、
		線形代数学（2）	○	2		2							井上浩一、三宅啓道
		微分方程式論		2			2						中井洋史
		ベクトル解析学		2			2						吉田稔
		フーリエ解析学		2				2					古田公司
		関数論		2				2					吉田稔
		数理統計学	○	2				2					陸名雄一
	自然科学系	物理学基礎		0	2								奥田隆、中澤直仁
		物理学（1）（注1）	○	4	4	(4)							岩松雅夫
		物理学（2）		4		4							岩松雅夫
		物理学（3）		2			2						岩松雅夫
		現代物理学		2				2					長田剛
		物理学実験（注2）	△	2	4	(4)							物理学教室
		化学基礎		0	2								大町忠敏、蛭原絹子
		化学（1）	○	2	2								高木晋作
		化学（2）		2		2							高木晋作
		化学（3）		2			2						吉田真史、堀越篤史
		化学（4）		2				2					吉田真史、倉田薫子
		化学実験（注2）	△	2	(4)	4							化学教室
		生物学（1）		2			2						倉田薫子、他
		生物学（2）		2				2					倉田薫子、他
		生物学実験（注3）		2			4	(4)					倉田薫子、他
		地学（1）		2			2						萩谷宏、他
		地学（2）		2				2					萩谷宏
		地学実験（注3）		2			(4)	4					萩谷宏、他
	情報系	情報リテラシー		2	2								安井浩之
		コンピュータ概論		2		2							木村誠聡
		プログラミング基礎	○	2		2							山口勝己、安井浩之
		数値解析		2			2						松山実
		情報処理技術		2					2				安井浩之
	工学教養系	工学リテラシー	○	2	2								秋谷昌宏
		技術日本語表現技法		2		2							京相雅樹
		技術者倫理		2					2				武藤範雄
		環境概論		2	2								萩谷宏、他
		環境と社会		2		2							堀内則量、他
		科学技術史		2		2							吉田真史、堂前雅史
		インターンシップ（注4）		2									教務委員
		海外体験実習（1）（注4）		2									萩谷、倉田、皆川
		海外体験実習（2）（注4）		2									萩谷、倉田、皆川
		科学体験教材開発		2	2								栗原哲彦、他
		科学体験教室実習		1									大上浩

注1: 2. - (1) - ①(p. 86) 参照, 注2: 2. - (1) - ②(p. 86) 参照, 注3: 2. - (1) - ③(p. 87) 参照, 注4: 2. - (1) - ④(p. 87) 参照

○印：必修，△印，□印：選択必修，無印：選択

区分 科目群		授業科目	必修 の別	単 位 数	週 時 間 数								担 当 者 (平成23年度現在)
					1 年		2 年		3 年		4 年		
					前	後	前	後	前	後	前	後	
専門 科目	機械学群 共通科目	工学基礎セミナー (注5)	□	2	2								全教員
		機械工作概論		2	2								新井正雄
		基礎設計製図	○	2		4							新井正雄, 和多田雅哉
		機械工作実習		2	4								新井正雄
		原子力汎論 (注6)		2									松本哲男
	電気・エネルギー学群 共通科目	フレッシューズセミナー (注5)	□	2	2								全教員
		原子力汎論 (注6)		2		2							堀内, 松本(哲), 本多
		プログラミング応用	△	2			2						京相雅樹
		電気化学		2			2						永井正幸
		信号とシステム	△	2			2						田口亮
		デジタル信号処理		2				2					田口亮
		地球環境科学		2				2					岡田往子
		環境アセスメント論		2					2				吉崎真司
	学科共通科目	解剖・外科学	○	2			2						森晃
		一般生理学	○	2			2						島谷祐一
		運動生理学	△	2				2					森晃
		電気生理学	△	2				2					島谷祐一
		診断・内科学	△	2					2				仁木清美
		感性工学		2					2				田口亮
		病理検査学		2						2			仁木清美
		公衆衛生学	△	2						2			中館俊夫
		脳神経認知学		2						2			島谷祐一
		生体センサ工学	△	2			2						平田孝道
		医用機器	△	2					2				田中秀明
		超音波医工学		2					2				入江喬介
		医用安全工学	△	2						2			田中秀明
		生物化学		2						2			黒岩崇
		医用画像機器		2						2			篠原正明
		材料力学	△	2			2						保川彰夫
		機構学	△	2				2					三輪洋靖
		機械材料工学		2				2					保川彰夫
		機械要素		2					2				森晃
		機械制御工学	△	2					2				和多田雅哉
		アクチュエータ	△	2						2			和多田雅哉
		電磁気学	○	2			2						桐生昭吾, 和多田雅哉
		基礎電気回路及び演習	○	3			4						秋谷昌宏, 平田孝道
デジタル回路	△	2				2					秋谷昌宏		
生体電子回路基礎	○	2				2					京相雅樹		
電子計測	△	2				2					平田孝道		
生体電子回路応用		2					2				京相雅樹		

注1：2.-(1)-①(p.86)参照， 注5：2.-(5) (p.87)参照， 注6：2.-(3) (p.87)参照

○印：必修，無印：選択

区 科 目 分 群		授 業 科 目	必 選 の 別	単 位 数	週 時 間 数								担 当 者 (平成 2 3 年度現在)
					1 年		2 年		3 年		4 年		
					前	後	前	後	前	後	前	後	
専 門 科 目	学 科 共 通 科 目	福祉ロボット工学及び実習	○	3			4						和多田雅哉, 他
		生理学及び実習	○	3				4					桐生昭吾, 他
		臨床機器学及び実習	○	3					4				仁木清美, 他
		特別講義 (BME-1)		2									未定
		特別講義 (BME-2)		2									未定
		特別講義 (BME-3)		2									未定
	治 療 メ カ ト ロ ニ ク ス	知能機械		2						2			和多田雅哉
		音響工学		2						2			桐生昭吾
		マイクロデバイス		2						2			秋谷昌宏
		人工臓器		2						2			和多田雅哉
		在宅医療学		2							2		森晃
	診 断 エ レ ク ト ロ ニ ク ス	生体信号解析		2					2				京相雅樹
		細胞・組織学		2					2				塩田清二
		視覚情報処理		2						2			田口亮
		診断理論		2							2		仁木清美
	卒 業 研 究 連 関 科 目	事例研究 (1)	○	2					2				全教員
		事例研究 (2)	○	2						4			全教員
		卒業研究	○	6									全教員

注 工学基礎科目及び専門科目の卒業必要単位数は下表のとおりである。

専 門 分 野	合 計	90単位	
	工学基礎科目	30単位	以下を含むこと ○必修科目 20単位 ◇選択必修科目 2単位
	専門科目	60単位	以下を含むこと ○必修科目 32単位 □学群導入科目 2単位 △選択必修科目 16単位

履修上の注意事項

1. 学習計画のたて方

(1) 科目履修の年次配分

2年次から3年次への進級、及び3年次から4年次への進級には、その時点での取得単位数による条件が定められている。2年次から3年次へは60単位が必要（巻頭「履修要綱」の「11. 3年次進級条件」参照）であり、3年次から4年次へは100単位が必要（詳しくは後述の「3. 生体医工学科の卒業要件および卒業研究着手の条件」参照）となる。このため、履修登録する科目を決定する際には、単位数と内容のバランスを考えた上で慎重に計画し、くれぐれも必要単位数不足で留年することのないようにしなければならない。

(2) 履修する科目の分野について

生体医工学科の専門科目では、医学、機械工学、電子工学の3つの分野を柱としてカリキュラムを組み立てているため、全体として多様な科目で構成されている。広い分野の知識を身につけられるという利点もあるが、科目間の関係を考慮せずに履修してゆくと、結果的にどの分野も不十分な知識しか身につかないことになるので、希望する研究室、進もうとする方向性を考慮した上で履修する科目分野を決定する必要がある。

計画的な履修のためにコース制を利用するのも一つの手段である。本学科の学生向けには、医学と機械工学の融合分野を学ぶための「治療メカトロニクスコース」および医学と電子工学の融合分野を学ぶための「診断エレクトロニクスコース」が用意されており、所定の単位を取得することにより卒業時にコースを修了したことが認定される。詳細は当冊子の「コース」に記載されているので参照すること。

(3) 成績(GPA)について

履修した科目の成績はGPA (Grade Point Average)を利用して集計される。GPAに基づく成績は、大学院への推薦入学や候補の選定や研究室配属などに利用される。したがって(1)に示した単位数の条件を満たした上で、良い成績が得られるように、つまり履修した科目の内容を完全に理解できるように努力する必要がある。GPAは、科目数を多く履修しても各科目の成績が良くなければ向上しない特性があるので、やみくもに多くの科目を履修するのは無意味である。まずは必修科目あるいは再履修科目など、優先して履修しなければならない科目を登録する科目の候補として選定し、これに各自の学習目標や学習意欲に合った科目を追加してゆくといよい。GPAに関しては、巻頭「履修要綱」の「9. 成績について」に詳しい記述があるので、それを参照すること。

2. 科目の履修について

(1) 工学基礎科目

専門科目に向けた基礎的な科目及び工学部の大学生として身につけるべき知識を得るための科目で構成されている。卒業研究に着手するためには、必修科目18単位、選択必修科目2単位を含めた20単位以上を取得しなければならない。また卒業までには30単位の取得が必要である。30単位を超過して取得した単位は、自由選択科目の単位として算入できる。工学基礎科目の中で、特に注意が必要な個別の科目については、以下に説明を加える。

① リメディアルクラスについて

「微分積分学(1)」、「物理学(1)」に設定されている「リメディアルクラス」で受講する場合、関連した科目の履修が1学期分遅れるなど、下記のように履修方法が通常と異なるので注意すること。受講時期については教育課程表中の週時間数の項目に括弧でくくられた数字で示してある。

リメディアルクラスでの受講方法

「微分積分学(1)」関連科目

	1 年前期	1 年後期	2 年前期
通常の履修方法	微分積分学(1)	微分積分学(2)	
	数学基礎		
リメディアルクラス受講者	微分積分学(1) リメディアルクラス（数学基礎を含む）		微分積分学(2)

「物理学(1)」関連科目

	1 年前期	1 年後期	2 年前期
通常の履修方法	物理学(1)		
	物理学基礎		

リメディアルクラス受講者

物理学(1) リメディアルクラス（物理学基礎を含む）

必修科目

選択科目

物理学実験及び化学実験について

教育課程表中の「必選の別」欄に「△」で示された「物理学実験」および「化学実験」は、どちらかを必ず受講すること。両方を受講することも可能であるが、その場合には一方の科目は選択科目の単位に算入できる。

また、これらはクラスにより前／後期入れ替えで実施しているため、教育課程表「週時間数」に括弧で囲んで前期または後期に受講することを示している。どちらの時期に受講するかは各自時間割表などで確認すること。

②生物学実験及び地学実験について

これらはクラスにより前／後期入れ替えでの実施あるいは集中講義形式で実施しているため、教育課程表「週時間数」に括弧で囲んで前期または後期に受講することを示している。どの時期に受講するかは各自時間割表などで確認すること。

③ 認定制の科目について

「インターンシップ」、「海外体験実習(1)」、「海外体験実習(2)」については受講時期が明示されていないが、これらは授業期間中に受講する科目ではなく、学外活動に参加し、その結果として事後に認定され、単位が与えられる科目である。これらの科目に関する情報は学内に掲示などの方法で提示されることもあるので、興味のある学生は掲示などの情報に注意すること。

(2) 学群共通科目

学群内で共通した内容を提供するのが学群共通科目であり、学群内の全学科に同じ科目が開講される。生体医工学科は機械学群及び電気・エネルギー学群両方に属しているため、2つの学群共通科目のカテゴリが存在する。取得した単位は「専門科目」の単位として算入される。

(3) 教育課程表内の同一名称科目について

「原子力汎論」は機械学群共通科目及び電気・エネルギー学群共通科目として同一名称の科目が2科目存在する。これら両方を履修することはできないので注意すること。また1年次には機械学群の原子力汎論を履修すべきであるが、これが不合格となった場合にはどちらの学群の原子力汎論も再履修科目として登録することができる。詳しくは教務委員に相談のこと。

(4) 専門必修科目

専門科目のうち、学科の学習内容を理解するために必ず必要な科目が専門必修科目であり、卒業までに合計で32単位を必ず取得しなければならない。また卒業研究の着手には、卒業研究及び3年次の一部の専門必修科目を除くすべての専門必修科目の取得が必要となる。

上記のように非常に重要な科目であるので、不合格となった場合には必ず再履修しなければならないが、その際に他の科目の履修に支障が出る場合がある。したがって不合格とならぬよう特に留意して学習すべきである。

(5) 専門選択必修科目

この科目は、教育課程表に「□」で示された科目と「△」で示された科目の2種類に分けられる。

まず、「□」で示された科目は機械学群、電気・エネルギー学群の導入科目である。2科目のうちのいずれかひとつのみを必ず履修すること。両方を履修することはできないので注意すること。また、どちらを履修するかは自分が属するクラスによって決まるのでそれに従うこと。

「△」で示された科目は分野ごとの基礎科目から構成されている。大きく分けて、医学分野、機械工学分野、電子工学分野である。全体で32単位を用意しており、この中から自分の希望する分野の科目を選択して履修する必要がある。卒業までに16単位、卒業研究に着手するためには10単位以上の取得が必要である。各研究室の研究内容に関連した専門選択科目の基礎知識となる科目もあるため、卒業研究のことも考えた履修計画をたてるべきである。また、将来進みたい方向あるいは就職を希望する業種にあわせた分野の選択必修科目を履修することが望ましいが、複数の分野を広く学習したい場合には意図的に様々な分野の選択必修科目を履修することも可能である。さらに、コースの認定を目指す場合には、このために必要な科目が含まれているので注意する必要がある。コースの認定については、コースのページを参照のこと。

(6) 専門選択科目

分野ごとに、最先端の技術や事例、あるいは様々な知識について紹介する科目が選択科目として用意されている。特に教育課程表の後半にある、「治療メカトロニクス」及び「診断エレクトロニクス」という分類の科目は、各研究室の研究分野と密接に関わる科目であり、またコースの取得に必要な科目でもあるので、卒業研究を希望する研究室に合わせて、あるいは希望するコース（コースのページ参照）に合わせて選択することが望ましい。

これらの分類の科目については履修すべき単位数は特に規定されていないので、卒業要件あるいは卒業研究着手条件を満たすように、かつ興味のある分野をくまなく学べるように履修計画をたてるべきである。

3. 生体医工学科の卒業要件及び卒業研究着手の条件

生体医工学科の卒業要件および卒業研究着手の条件は、以下の通りである。

		卒業要件		卒業研究着手条件	
総単位数		124単位（ただし、下記の各要件を含むこと）		100単位（ただし、下記の各要件を含むこと）	
共通分野	合計	20単位		18単位	
	教養科目	10単位		8単位	
	外国語科目	8単位	以下を含むこと ○必修科目 6単位	8単位	以下を含むこと ○必修科目 6単位
	体育科目	2単位	○必修科目 2単位	2単位	○必修科目 2単位
専門分野	合計	90単位		78単位	
	工学基礎科目	30単位	以下を含むこと ○必修科目 20単位 △選択必修科目 2単位	28単位	以下を含むこと ○必修科目 18単位 △選択必修科目 2単位
	専門科目	60単位	以下を含むこと ○必修科目 32単位 □学群導入科目 2単位 △選択必修科目 16単位	50単位	以下を含むこと ○必修科目 26単位 □学群導入科目 2単位 △選択必修科目 10単位

4. 卒業研究について

卒業研究の目的は、医学および工学の具体的な課題について、それまで修得した医学、機械工学、電子工学の一般的、ならびに専門的な知識を基礎としながら、自ら考え、調査・学習し、解決していく方法、その経過およびその結果を集約して発表する方法を修得することにある。卒業研究の着手条件を満たした者はいずれかの研究室に配属され、教員の指導助言のもとに、文献調査、実験的研究を行ってその成果を論文にまとめ、発表して評価を受ける。卒業研究を行うには、3年次終了時点で115単位ないし120単位程度を取得しておくことが望ましい。

卒業研究に先立ち、3年次前期終了後には研究室への仮配属が行われる。仮配属のプロセスとしてはまず、仮配属条件を満たした仮配属対象者に対して希望調査を行い、次に希望状況や成績などを加味した上で研究室が決定される。仮配属条件を満たさない場合でも、3年次終了時に卒業研究着手条件を満たせば、その時点で研究室への配属が行われる。仮配属条件やその決定プロセスについては、3年次のガイダンスなどで通知する。

5. 履修に関する相談先

履修の手続きやルールに関する相談については学生支援センターで受け付けているが、教務委員も相談に乗ることが可能である。生体医工学科の専門科目の内容に関する質問、自分の進路に合った科目を履修するにはどうすれば良いかといった質問は教務委員またはクラス担任に相談すること。また個々の科目の内容に関する質問は各科目の担当者に連絡を取ること。

生体医工学科 専門教育系統図

1 年		2 年		3 年		4 年			
前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期		
数 学 系	微分積分学(1)	微分積分学(2)	微分方程式論	フーリエ 解析学					
	線形代数学(1)	線形代数学(2)	ベクトル 解析学	関数論					
			数理統計学						
自 然 科 学 系	物理学(1)	物理学(2)	物理学(3)	現代物理学					
	物理学実験	物理学実験	※ 前期または後期いずれか						
	化学実験	化学実験	※ 前期または後期いずれか						
	化学(1)	化学(2)	化学(3)	化学(4)					
			生物学(1)	生物学(2)					
			※1生物学実験	※1 前期2クラスのうちいずれか					
			※2地学実験	※2地学実験				※2 前期または後期いずれか	
			地学(1)	地学(2)					
機 械 系	工学基礎 セミナー		材料力学	機構学	機械制御工学	アクチュ エータ			
	機械工作概論					人工臓器			
	基礎設計製図		機械材料工学		機械要素	知能機械			
医 学 系			解剖・外科学	運動生理学	感性工学	脳神経認知学	在宅医療学		
			一般生理学	電気生理学	診断・内科学	病理検査学	診断理論		
					細胞・組織学	公衆衛生学			
					医用機器	医用 安全工学			
電 子 ・ 情 報 系	フレッシュャーズ セミナー	基礎電気回路 及び演習	生体電子回路 基礎	生体電子回路 応用					
		電磁気学	電子計測	超音波 医工学				音響工学	
		生体センサ 工学	ディジタル 回路	ディジタル 信号処理				マイクロ デバイス	
		プログラミング 基礎	プログラミング 応用	信号と システム				生体信号解析	視覚 情報処理
		情報リテラシー	コンピュータ 概論	数値解析					情報処理技術
実 習 ・ 卒 論	機械工作実習	福祉ロボット 工学及び実習	生理学 及び実習	臨床機器学 及び実習					
				事例研究(1)				事例研究(2)	卒業研究
工 学 教 養 系	原子力汎論	原子力汎論	電気化学		地球環境科学		生物化学		
	環境概論	環境と社会					環境 アセスメント論		
	科学体験 教材開発	科学技術史	技術者倫理						
	工学リテラシー	技術日本語 表現技法							
			科学体験教室 実習	海外体験 実習(1)	海外体験 実習(2)	インターン シップ			
凡例	必修	選択必修	選択	学年配当なし					

資 格

1. 臨床工学技士

(1) 資格の概要

医師の指示のもとに生命維持管理装置の操作および保守点検を行うための資格であり、医学と工学両方の知識と経験を持つことが求められる。医療機関における医療装置の専門家として、また医療機器メーカーの技術者として有用な資格である。特定の医療装置の操作あるいは管理は、この資格の保有者にしか認められていないため、医療施設への就職を希望する場合には特に有効である。

(2) 資格の取得方法

厚生労働省が実施する国家試験に合格することにより取得できる。受験資格の取得には、当学科のカリキュラムの中から受験資格に必要な科目を履修し、さらに厚生労働大臣が指定する養成所(専門学校)で1年間必要な技術を習得することが必要である。

情報の収集方法、問い合わせ先

下記の厚生労働省、(財)医療機器センターのWebページから受験資格に関する規定などの情報が得られる。受験資格取得に向けて履修すべき科目に関する質問は教務委員まで。

厚生労働省のWebページ：<http://www.mhlw.go.jp>

(財)医療機器センターのWebページ：<http://www.jaame.or.jp>

2. 第2種ME技術者

(1) 資格の概要

日本生体医工学会が実施している認定試験で、ME機器・システムの安全管理を中心とした医用生体工学に関する知識を持ち、適切な指導のもとでそれを実際に医療に応用しうる資質を問う試験である。

(2) 資格の取得方法

第2種ME技術実力検定試験を受験して合格すれば取得できる。受験資格の制限はないため、在学中に受験することが可能である。夏休み中の講習会の開催など、取得に向けた積極的な支援を行う予定である。

(3) 情報の収集方法、問い合わせ先

試験に関する情報は(社)日本生体医工学会のWebページで確認することができる。また、受験に必要な知識を得るために履修すべき科目、学習の仕方、あるいは受験に向けたサポートに関する情報は教務委員まで。

(社)日本生体医工学会のWebページ：<http://www.jsmbe.or.jp/>

3. 教育職員免許

(1) 資格の概要

教育職員免許法に基づき、学校の教師になるために必須の資格である。当学科で取得することができる免許の種類は下記の通りである。

中学校教諭	一種免許状	「数学」
高等学校教諭	一種免許状	「数学」
中学校教諭	一種免許状	「理科」
高等学校教諭	一種免許状	「理科」

(2) 資格の取得方法

当学科では、必要な単位を取得することにより、中学校および高等学校において数学あるいは理科を担当するための資格を取得することができる。資格取得のためには、卒業に必要な科目以外に教職課程の科目も受講する必要がある。受講すべき科目および履修方法については、当冊子の「教職課程」の項目を参照すること。

(3) 情報の収集方法、問い合わせ先

詳細は当冊子の「教職課程」の項目を参照すること。

